美味しんぼ探偵局

ーだれがラーメンを殺したかー

雁屋哲

角川文庫

美味しんぼ探偵局

雁屋 哲

角川文庫 8294

平成三年七月十日　初版発行

発行者——角川春樹
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話　編集部(〇三)三八一七—八四五一
営業部(〇三)三八一七—八五二一
〒一〇二　振替東京③一九五二〇八
印刷所——大日本印刷　製本所——大谷製本
装幀者——杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。
落丁・乱丁本はご面倒でも小社通信販売課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。

©Printed in Japan

か 22-2　ISBN4-04-178302-X C0193

美味しんぼ探偵局

だれがラーメンを殺したか

雁屋哲

角川文庫 8294

目次

第一章　ラーメン屋連続失踪事件　五
第二章　女刑事、その名はよう子　一一
第三章　美味しんぼ探偵登場す　三一
第四章　ラーメン戦争　六四
第五章　捕虜　九二
第六章　『龍』と『虎』　一一三
第七章　危ういところで……　一三六
第八章　ラーメンは死んでいる　一四一
第九章　ここでもラーメンは死んでいた　一七五
第十章　糸口　一九八
第十一章　検証　二三五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第十二章　見えてきた背中　二五六
第十三章　野獣の捕獲　二七二
第十四章　訊問（じんもん）　二八七
第十五章　失望　三〇三
第十六章　大団円　三一三
エピローグ　三三一
解説　玉村豊男　三三八

第一章　ラーメン屋連続失踪事件

四月一日の深夜、銀座で一番繁盛しているラーメン屋『万勝軒』の主人万田勝一が失踪した。

『万勝軒』は四丁目の『和光』の裏にある。店の前には開店三十分前の十一時から、順番待ちの行列が出来て、午後三時から五時までの休み時間の他は閉店の夜九時までその行列が途絶えないという繁盛ぶりなのだ。

行列は長い時には、『和光』の裏通りから晴海通りに出て、ずうっと有楽町の『マリオン』までつながることがある。早速おせっかいな連中があの『ギネス・ブック』に「ラーメン屋順番待ち行列世界最長記録」として申請したが、イギリスのギネス本部から「何のこっちゃ。よう分からん」と文句がついて、あわてて、長嶋茂雄氏がギネス本部に説明に行く騒ぎとなった。

万田勝一作るところの『万勝軒』のラーメンは、いわゆる「純東京風ラーメン」で、スープのだしは鶏のガラとカツオブシと昆布で取り、上に載せる具はチャーシュウとメンマ

とナルトとノリ、という極めて古典的なものなのだ。

味はあっさりしている。だが、淡すぎる訳でも軽すぎる訳でもない。

最初に一口二口麺をすすりこんだ段階では、「ぬうう……。これはどうにもあっさりしている。これでは二杯か三杯お代わりをしないことには腹がふくれないぞ」と思ったりしても、メンマを食べ、チャーシュウを食べ、最後に一口大事に取っておいた麺をすすりこむ頃になると、いつの間にか丁度良い腹具合になっているのに気づく、という何とも内容のあるラーメンなのである。

その味が評判になって、順番待ちの大行列が出来ることになったという訳だ。

万田勝一は五十歳。

小柄で丸々と肥っていて、頭は側頭部と後頭部のぐるりを残して禿げ上がっている。残った髪は半分白髪で、それを短く刈り上げている。

顔も丸く、眼も丸く、鼻も丸く、ついでに人柄も丸い。実直だが陽気な性格が店の雰囲気にそのまま反映して、『万勝軒』が繁盛する要因の一つともなっていた。

万田勝一は、『万勝軒』のある『和光』裏から歩いて十分ほどの距離にある新富町に、妻のはなと二人で住んでいた。

家は敷地二十坪、延坪三十五坪の木造二階建ての仕舞屋で、万田勝一が『万勝軒』を開店した時以来二十五年間住みつづけている。

その家から、四月一日の深夜、万田勝一は妻のはなを残して姿を消してしまったのである。

万田勝一が姿を消した同じ夜、池袋のラーメン屋『札花亭』の川村幸男が失踪した。

『札花亭』は西武デパートの横にある。

順番待ちの行列が出来ることでは『万勝軒』に劣らない。いい迷惑なのは西武デパートで、夏と冬には、暑さ寒さを逃れるために行列は西武デパートの中にのびる。

時には、入口から階段沿いにのびて行って最上階の大食堂の前まで行列が続くこともあるのに、誰一人として大食堂に入ろうとしない。

それはあんまりだ、というので店長が行列の店内侵入を禁止したところ、翌日その店長はクビになった。実はその行列の中に西武デパートの社長も並んでいたことを店長は知らなかったのである。それ以来『札花亭』の順番待ちの行列が店内にどんなに長くのびて行っても、文句をつける者は、少なくとも西武デパート関係者の中にはいない。

『札花亭』は札幌ラーメンを売り物にしている。

味の決め手は味噌である。

数種類の味噌に様々な調味料を加えて練り合わせ、時間をかけて熟成させたものを使っている。川村幸男は作り方のコツを隠すようなこせこせした男ではなく、尋ねられれば誰

にでも味噌の種類から練り合わせの手順まで丁寧に教えてやるし、自分が味噌を仕込むところを見学させてやったりもする。

今までに、あちこちのラーメン屋が川村幸男に習ったとおりの味噌ラーメンをメニューに乗せて成功しているが、それが『札花亭』の本家としての名声を高めることとなった。川村幸男に作り方を習ったラーメン屋の主人たちは定期的に『札花亭』に食べに来て、本物の味を忘れないように努力するのである。

肉と野菜のたっぷり入った実だくさんの『札花亭』札幌ラーメンは、見た眼はえらく濃厚でこってりしていて腹に「どし」とこたえそうだが、あと口があまりにさわやかなのに初めての客はおどろく。たしかに味にはこくがあり、食べでのあるラーメンなのだが、食べ終わると食べ始める時より腹が減っているように感じたりもする。

それだけ、素直で純粋な味ということなのだ。もちろん、もたれたり胸やけがしたりすることはあり得ない。

川村幸男は万田勝一と同じ五十歳。万田勝一とは対照的に長身痩軀。まだほとんど白い物のまじらぬ髪をきっちり七三に分けて一寸の乱れもない。その外観通り極めて神経が鋭く、特に麺がゆで上がる頃合いを見極める時の表情は恐いくらいになり、その様子が客の心を打ち、熱狂的な川村信者を作り出していた。

川村幸男は西武池袋線の江古田駅から歩いて七分ほどのところに住んでいた。妻を数年

前に亡くした川村幸男は一人息子で二十八になる良一と二人ぐらしだったのだが、四月一日の夜、良一には何も告げずに姿を消したのである。

万田勝一と川村幸男が姿を消した翌日、新宿のラーメン屋『九久舎』の主人、権藤久が失踪した。

『九久舎』は新宿区役所のならびにある。

順番待ちの行列は出来ない。

人気がないせいではない。逆に人気がありすぎて長い行列が出来るので、客に整理券を渡すようにしたのである。

客は店に来ると入口で整理券をもらう。整理券には時間が書いてある。その時間に再び来れば待たずに食べられることになっている。

平均待ち時間は五十分ほどなので、客はその間に用事をすませることも出来るし、店の前が混雑することもない。何もすることのない客は新宿区役所のロビイで新聞を読んでいたりする。新宿区役所のロビイにいる人間の半分以上は『九久舎』の順番待ちの客であることが、新宿区議会で問題になったことがある。

『九久舎』のラーメンは九州の鹿児島ラーメンである。

豚骨を徹底的に煮て取るスープは白くにごっていてこってりした味が売りものだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

権藤久は五十一歳。九州出身の大男で、顔はひげむじゃら、腕は毛むくじゃら。眉毛はゲジゲジ眉毛。

その容貌どおり豪快そのものの性格で、作るラーメンも、大きなドンブリに麺も具もこれでもかこれでもかと盛りこんだ豪快なものなのだ。

しかし、味は複雑で玄妙、時に優雅でさえある。

豪快さと味わいの深さで評判を取り、京都のしにせの料亭の主人が、たった一杯のラーメンを食べるために新幹線に乗って通いつめるほどで、一度食べると中毒になる悪魔的な魅力を持っていると言われている。

権藤は富久町のアパートに住んでいる。アパートと言っても全部が権藤の持ち物で、権藤久はその最上階全部を自分で使い、娘一家と一緒に暮している。

そのアパートから、娘や孫に別れも告げず、権藤久は四月二日の深夜に失踪したのである。

東京で三人のラーメン屋が失踪した。

この三人の失踪が、東京だけでなく日本中を巻きこんだ「ラーメン戦争」の始まりだったのである。

第二章　女刑事、その名はよう子

水野よう子は機嫌が悪かった。

それも、ひどく悪かった。

銀座通りを四丁目から一丁目へ向かって、不機嫌の固まりになって歩いていた。

世の中には運の悪い人間がいるもので、その水野よう子に若い男が一人すりよって来た。

いかにも有名なDCブランド物ふうの服に身をかため、髪も流行の刈り上げ型。陽焼けした顔は無意味に健康的で、無内容の人格をあらわにしていた。

男は水野よう子にすり寄って、並んで歩きながら、甘ったるい声で言った。

「かあのじょお、お茶でも呑まない」

よう子は横眼で男をにらんだ。その眼からは百万本の針が男めがけて噴き出ているのだが、男はそれに気がつかない。

「ねえ、かあのじょお、青学？　フェリス？　それとも聖心？」

よう子はカッとなった。

よう子の大学は桃花女子大学で、青学やフェリスや聖心なんかよりはるかに格が上だ。

だがカッとなったのは、男が桃花女子大の名を言わなかったからではない。一年も前に卒業しているのに、その男がまだよう子を女子大生だと思ったからである。

男はなおもなれなれしくすり寄って来て、よう子の肘の上のあたりをつかんだ。

「かあのじょお、ハマまでぶっとばそうよ。ハマにさ、いい店があるんだ。ウォーター・フロントでさ、レトロでさ。ねえ、いこうよう」

男はもう一方の手で車の鍵をチャラチャラ見せびらかす。キイ・ホルダーにはBMWのマークがついている。

「離しなさい」

よう子はおさえた声で言った。

「へ、へ、いいじゃん、かあのじょお」

男は離すどころか、よう子の腕をにぎった手に力をこめる。顔まで近づけて来る。

気持ちが悪い。虫酸が走る。

次の瞬間、よう子は男の手をふり払い、そのまま肘を男のみぞおちに打ちこんだ。

「ぐえっ」

ぐらりと前に上体を傾ける男の首のつけ根に手刀を一発。

男は舗道の上にどうと倒れた。

たまたま、前方から歩いて来たパトロール中の警官が二人、おどろきあわてて飛んで来

た。
「き、君っ！」
「何をするっ！」
二人の警官はわめいた。
「暴力行為現行犯だっ！」
「ちょっと署まで来てもらおうっ！」
よう子は静かにスーツの内ポケットから手帳を取り出した。金色の桜の紋章がまぶしい。
二人の警官は眼を丸くした。
「け、警察手帳っ！」
「ま、まさか」
警察手帳を開いて二人の警察につきつける。
よう子の顔写真と、警官での身分が書かれている。
二人の警官はあわてて直立不動の姿勢を取った。
「警視庁。捜査一課。警部補。水野よう子どの！」
「ほ、本庁の警部補どのでありましたかっ」
水野よう子は桃花女子大在学中に国家公務員上級職試験に合格し、去年、卒業と同時に警察庁に入庁し、今年の春、警視庁に配属になったのである。

同じ国家公務員でも上級職試験に合格した者とそうでない者とでは出世に大きな差がつく。警察官になるのでも上級職試験に合格したものは最初から警部補の身分が与えられるが、上級職試験に合格していない者はひらの巡査から始まり、警部補に昇進するためには八年以上かかるのだ。

上級職試験に合格した者はキャリア、合格していない者はノン・キャリア、と公務員の世界では言う。ひとにぎりのキャリアがエリートとして官僚組織を支配しているのである。

二人の警官はひらの巡査か巡査長だったのだろう。よう子がキャリアで本庁の警部補と知って直立不動の姿勢を取るのも無理はない。

「この男は私に失礼なことをしようとしたのよ。交番につれて行って、説教をしてから帰してやりなさい」

「はい！」

「承知致しましたっ！」

よう子は集まって来た野次馬の間をすりぬけてその場をあとにした。後ろでは、二人の警官が倒れた男を介抱している。

機嫌の悪いよう子を口説こうとするとは、運の悪い男だ。

よう子は祖母のふじ枝に古柔術を子供の頃から教えこまれていて、警察庁に入ってからも週一回の道場通いはかかさないのである。この古柔術は柔術の元祖であるが、デブの社

交ダンスと化した現在の柔道とは違って、突きも蹴りも投げも絞めも、全ての技を使う実戦向きの武術なのだ。

気持ちの悪い男を叩きのめして、少しは気分がすっとしたが、機嫌はまだ直らない。

よう子の機嫌が悪いのは、「ラーメン屋連続失踪事件」を担当しろ、と捜査一課長の時里信太に命令されたからである。

よう子が警察庁につとめたいと言い出したとき、両親も二人の兄たちも、女子大の教授たちも反対した。

よう子の父、水野一郎太は水菱銀行の頭取であると同時に、商社、コンピューター会社、自動車会社、石油会社、電鉄会社、テレビ会社、などを傘下に持つ水野財閥の当主であり、一人娘のよう子のアクセサリィとして桜の代紋が似合うと考える美意識は持っていなかった。

一郎太は説得し、おどし、すかし、しまいには土下座して泣いて見せたりまでして、よう子に志望をひるがえすようにせまったのだが、よう子は自分の意志を通し切った。

一郎太は最後の手段として、汽車の模型を集めるのが趣味の警察庁長官に満鉄『あじあ号』のHOゲージの模型を贈り、よう子を採用しないように頼んだのだが、『あじあ号』をもらって有頂天になった警察庁長官は水野一郎太の頼みを聞きまちがえて、人事担当係官が女性を採用するのはどうもと尻ごみするその尻を叩いてよう子を採用させてしまった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com